



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	沖縄県における児童の健康自己概念と学習意欲の関連
Author(s)	島袋, 恒男; 喜久川, 美沢
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(84): 195-203
Issue Date	2014-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31955
Rights	

沖縄県における児童の健康自己概念と学習意欲の関連

島袋恒男・喜久川美沢*

A study on self-concept of health and school motivation in children

Tsuneo shimabukuro Misawa kikukawa

要約

「健康な子とは？」という刺激語に対する連想語を教師に対する予備調査で収集し、それをKJ法に準じた形で整理し「児童の健康自己概念調査票」を作成した。そして児童を対象とした健康自己概念に関する調査を実施した。結果にクラスター分析を施し、人とのつながりを示す「連帯感」、自分の生活や学習のコントロール力に関係する「生活習慣・自己統制」、友達との関わり・活動を示す「屋外集団遊び」と心身のストレスを示す「心身の不健康」の4つの健康自己概念の特徴が明らかにされた。「屋外集団遊び」は「連帯感」を高め「生活習慣・自己統制」につながる可能性がうかがえた。健康の自己概念の4つのクラスターを学習意欲の指標である学習CAMI尺度との相関を求めた。健康自己概念の高さは、学習における「教師の援助の保有感」、「努力の保有感」「達成への統制感」と正の相関を示し、健康自己概念が学習意欲の高さにつながっていることが示された。健康自己概念の発達は「人とのつながりの中で規範に基づく行動と生活習慣の確立が、心身の健康に影響して意欲・やる気を喚起し、学習面の意欲につながる」と考察された。具体的には、集団活動・遊びの時間を日課に設け、保護者と連携して基本的な生活習慣を確立すること、健康教育を充実しながら個々の児童生徒に健康の自己概念を育む必要のあることが提案された。

キーワード

健康自己概念 学習意欲 CAMI 生きる力

1 はじめに

平成14年度に喜久川は「健康に関する日常的概念の検討—健康の自己概念の育成をめざして—」のテーマで研究を行った。それは、WHOの唱える健康の定義が観念的・抽象的であることに気づき、このように観念的・抽象的な健康の概念を子どもたちに教えるのに日常的で具体的な表現にすることが効果があると考えたからである。そこで、「日常生活の中で人が捉える健康のイメー

ジ」である日常的概念を明らかにするために教師と児童を対象にアンケート調査を実施した。また、健康の概念を日常的で具体的なものとするために、「健康な子ども」をイメージさせて子どもに健康の自己概念（健康のイメージ・健康観）を育むことを目標に授業実践を行った。その結果、健康の概念を捉えさせるには、「健康」ではなく、「健康な子ども」という言葉で健康の状態をイメージさせることが効果的であることが明らかになった。つまり、「健康とは？」と問うより「健康な

* 沖縄県立看護大学

子どもってどんな子？」と問うた方が、「ご飯をいっぱい食べる子ども」「好き嫌いのない子ども」「汗をかいて遊ぶ子ども」というように各自がもっているイメージを容易に捉えることができたのである。さらに、今回の研究で明らかになった「心身が不健康な状態になると心身のエネルギーが低下し、心身のエネルギーの低下は、学ぶ意欲や登校意欲の低下につながる」という点については、調査対象を広げて研究を深める必要性が出た。

前回の研究から10年を経過した現在、学校経営の経験をする中で、子どもたちに学力をつけることは、学校教育の目標・使命であることを認識した。また、学力を向上するには、子どもたちに学習への意欲・やる気（学習意欲）を持たせることが最も重要であることも認識した。つまり、学習意欲が高まれば、自発的・主体的に学習に取り組むので、自ずと学力は向上すると考え、学習意欲に絞ったのである。しかし学習意欲は直接的には学習関連活動に直接規定されることが予測されるが、学習活動を十分に展開させて行くには、心身の「健康」が必要になることは十分に予測されることである。そこで本研究では、「健康自己概念」の検討とともに健康自己概念のあり方が学習意欲とどのように関連するか検討することにした。

学力については、平成8年中央教育審議会答申で提唱された「生きる力」で捉える。生きる力については、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で「変化」の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自ら律しつつ、他人とともに強調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力」と提言している。平成20年学習指導要領改訂においても、生きる力の理念は提唱され、生きる力の「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和のとれた子どもの育成が求められている。生きる力の「確かな学力」が一人一人の子どもに身につけさせる学力であると捉える。また、「豊かな心」は「確かな学力」を支え、「健やかな体」「健康・体力」はそれらをさらに下支えし、学習意欲の高まりに影響を及ぼしていると考えた。

そこで、本研究においては、沖縄県の4地区（国頭・中頭・那覇・島尻）の小学6年生の児童を対象に調査を行い、健康自己概念（健康に対する自己理解・健康のイメージ）の特徴を明らかにする。また、CAMIの理論を用いて学習意欲に関する項目についても調査を行い、健康自己概念と学習意欲は関連があるかどうかを検討する。

さらに、明らかになった子どもの学習意欲の高まりに影響を及ぼす健康自己概念の特徴から、学習意欲を高める方法についてまとめたいと考える。

2 研究の基本的な考え方

(1) 健康の定義について

健康の定義は、WHOの唱える「健康とは、身体的にも精神的にも社会的にも完全に良好な状態をいい、単に病気がないとか虚弱でないとかいうことではない」が一般的である。WHOの定義以外にも健康については、多様な定義がなされてきた。表1「健康概念とその分類」（引用：大澤清二著健康教育の哲学と方法を求めて）からも健康の捉えは、一人一人考えが異なるように、健康の捉え（健康観）も多種多様であることが分かる。

表1 健康概念とその分類（大澤清二 2000）

特徴	主な概念と定義例
1 状態 総合 的 vs 部分 局的 面的	<ul style="list-style-type: none"> 健康とは、単に病気がないとか、虚弱でないというのではなく、身体的にも精神的にも社会的にも完全に良好な状態である（WHO） 自己の能力を十分に発揮しながら幸福な人生生活を送って長寿を保つことのできる心身の理想的状態のこと（小栗） 健康とは、体内部の近郊状態にほかならない（蒲本） 身体の巨視生理学的な調和のこと（木田） 健康とは、奇形や欠損がなく、内臓諸器官が生理的活動している状態（猪飼）
2 能力 適 性・ 適応	<ul style="list-style-type: none"> 十分な実りがあって、楽しむことのできる生活への個人的な適正能力である（ホイマ性・適応） 帝王としての健康（デュボス）

表1 健康概念とその分類 (大沢清二 2000)

3 指標による把握	・健康感をもち客観的に異常が見られず、仕事の能力が十分に発揮されている。(大島) ・「食事がおいしい」「かぜをひかない」「疲れない」「よく眠れる」「気分がいい」(児童生徒の保健認識)(戸田・パウマン)
4 外枠概念位置づけ	・個体保存の欲求・害の回避(マレー)・基本的欲求・健康→衛生(マリノフスキー) ・健康の本質(ビイレイ、ヤング、パーソンズ)
5 成立条件と結合	・児童生徒、学生の健康と体力概念に関する保健認識調査結果(内山)
6 集団社標	・それは人間における集団的秩序の身體的または精神的な表現形態である(富会)の指永)

(2) 健康の自己概念

健康の自己概念とは、自らの健康の捉えであり、健康に関する自己理解・イメージである。健康観と言い換えることもできる。

(3) 健康と健康な子どもの捉え

健康に関する捉えや定義は、表1に示したように多種多様である。このような多種多様な捉えの中から、次の健康の捉えに共感する。「病気や障害をハンディやマイナスと捉えるのではなく、自分のありのままの状態とうまくつきあいながら、生きていくことが健康なのである」「病気や障害があったとしても、生き生きと勉強や運動をしている子どもは、精神的・社会的に健康である」健康な子どものイメージについては、「健康な子どもとは、健やかな健康観(wellbeing)をもち、病気や障害があっても生き生きと勉強し、生き生きと遊び・運動している子ども」と捉えることができる。

(4) CAMI

CAMIとは、自己の目的達成に関する目的達成への統制感(Control Beliefs)、そして手段保有感(Agency Beliefs)、手段-目的関係の一般的認知(Means-ends Beliefs)の頭文字に

InterviewのIを加えた略称である。統制感は、目的達成への自信や無力感に関係しており、目的行動の遂行を直接的に決定する側面といえる。そして、この統制感のあり方を決定していると思われるのが、手段の保有感であり、目的達成に向けての手段(努力、能力、運、他者の援助)がどれだけ自分に備わっているかという側面である。そして、手段保有感のあり方を方向づけられると思われるのが、手段-目的関係の一般的認知であり、手段としての努力、能力、運、他者の援助、未知の原因が想定される。島袋ら(1995)によると、Skinnerら(1988)は、人の目的指向行動には、行為者、目標、手段という3つの側面が含まれると考え、行動の予測には行為者と目標の関係(統制感)、行為者と手段の関係(手段保有感)、手段と目標の関係(手段の認識)の3つの側面を理解することの重要性を指摘した。このような理論に基づき学習場面におけるCAMI尺度がSkinnerらによって開発された。

(5) 学習意欲とは

学習意欲については、下山剛(2000)は、「積極的に学習しようとする気持ち」「種々の動機の中から学習への動機を選択して、学習することを目標とする能動的意志活動」としている。そして、学習意欲には次のような性質が含まれるとしている。

①積極性・能動性

他から言われたり、強制されてするのではなく、自発的・積極的に学習に取り組もうとする。

②内発性

目標は学習すること自体にある。何かのためというのではなく、知りたい、分かりたい、学習したいという動機から学習活動が内発するというものである。

③価値志向性

知らないことを知る、分からないことが分かる、できなかったことができるようになる、さらに、そうなることは自己を伸ばし高めることになるという学ぶことの価値に志向した、あるいはそれに支えられたものである。

中央教育審議会答申においては、確かな学力は「知識や技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判

断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」と定義されている。そして、その中身として「課題発見能力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力、学ぶ意欲、知識・技能、学び方」が示されているように学ぶ意欲（学習意欲）は学力の中身の1つと考えられる。

学ぶ意欲の意味について、小島宏(2008)は、次のように述べている。

- ①学ぶ意欲（自ら学ぶ意欲）とは、新たな課題などを見つけ、それをよりよく解決したり、よりよいもの、より確かなもの、より納得のできるもの を目刺して追究し続ける態度に支えられるものである。
- ②学ぶ意欲には、「教師や保護者から与えられた課題に自発的に取り組む学習の場合」と「教師や保護者から言われたことではないのに、自分が好きです読書とか、蝶を追いまわして図鑑で調べるなど自発的にする学習」の2通りがある。③学ぶ意欲とは、何らかの学習目標（課題・問題）を達成するために、学習行動を企画し、判断し、行動し、継続し、集中する意志である。
- ③学ぶ意欲ということをごく素直に考えれば、学校で教えようとしている内容を自ら学ぼうとする意欲ということになる。学ぶ意欲ということ自分の学習を進める、あるいは阻止する心理的統制の1つとして見ると、この学ぶ意欲とは、学習に対する自己統制の問題としてもよい。
- ④学ぶ意欲とは、何らかの学習への欲求を選択し、それを実現しようとする心の働きである。すなわち、学習者自身が意志的、自発的に学習活動を求めようとする働きである。すなわち、学習者自身が意志的、自発的に学習活動を求めようとする働きであり、学習活動に対する欲求とその実現を含んでいる。

(6) 環境に存在する意欲の捉え方

意欲・やる気について、池谷裕二(2008)は、次のように述べている。

「やる気を出せと言われても出せるものではない。意欲を脳の中に探しても見つからない。やる気の発火点は脳ではなく、環境にある。意欲・やる気・集中力などを発揮するのにプラスとなる情

報（ポジティブな刺激）を私たちの脳は5感を通じて無意識ながらに取り込んで、それに体も反応している。やる気が起こるのは脳ではなく、体あるいは環境の要因で決まる。教育におけるポジティブな刺激は、誉めることや励ますことである。復習又は実践と言いつけてもいいが、勉強でもスポーツでもここをしっかりとやらないと身につかない。意欲はひとりぼっちの脳の内側から自然に湧くものではなく、脳を取り巻く

環境とのやりとりを通じて初めて起こり、次なる行動を促すのである。」

(7) 基本的な生活習慣の確立

基本的な生活習慣の確立について、新井立夫(2009)は、次のように述べている。「現代の子どもたちは、基本的な生活習慣が身につかず、自己を律する心が備わっていないように思われる。社会での生活様式が変化し、日常生活の中での他者との関わりが少なくなる中においては、健康な心と体を育むことはより困難になった。それゆえ学校教育をはじめとして意識的に「心」と「体」への教育を行うことが求められている。健康な心と体を育てるためには、まず基本的な生活習慣を確立しなければならない。」学校教育における基本的な学習習慣の確立の必要性についても次のように述べている。

「学校教育での知育・徳育・体育3つの領域の育成過程においては、調和が重要である。特定の領域に悪影響を及ぼし、結果的に望ましい人間としての育成が妨げられる。また、学校教育だけでなく、社会全体が今日的な課題として、健全な精神のよりどころとした体のあり方をとらえなければならぬ。その際、単に肉体としての健やかな体ばかりでなく、精神性を含めた形での健やかな体を育てていくという考え方であることはいままでもない。物事に集中して継続性をもって取り組むことは、基本的な生活を身につけ、基本的な体力に裏打ちされてこそ、はじめて可能になる。

3 研究の方法

(1) 調査の目的

沖繩権における児童の健康自己概念の特徴を整

理し、学習意欲との関連を検討することで、学習意欲に影響のある因子を明らかにする。今回は学習意欲尺度ではなく、学習意欲の発達にとり学業達成への統制感と努力・教師の援助の保有感という「手段－目的関係」の成立を重視する学習CAMI尺度で検討する。

(2) 調査方法

①「心と体の健康についての調査

〈無記名による質問紙調査〉

- A 健康のイメージ（健康自己概念）測定項目 45 項目 4 件法
- B 学習意欲尺度（CAMI）の項目 20 項目 4 件法
- C 学習・遊び・健康意識に関する項目 11 項目

〈調査対象〉

沖縄県 4 地区（国頭 67 名・中頭 171 名・那覇 76 名・島尻 53 名）の小学 6 年生（367 名、男子 185、女子 182 名）

〈調査期日〉

2012 年 9 月 1 日～9 月 30 日

4 調査の結果と考察

健康自己概念のクラスター分析結果

子どもたちの健康に関するイメージ（健康自己概念）を見る 45 の質問項目を作成し、質問項目相互の関係を明確にするために、45 項目の結果に基づいてクラスター分析を行った。その結果、45 の質問項目の相互に類似したものを CL1～CL

4 の 4 つのクラスター（グループ）に分類した。4 つのクラスターの特徴を図にしたのが、図 1 である。

図 1 から、CL1 は「人に聞いたり、たすけてもらう」「相手の気持ちを考えて行動する」「礼儀正しくていねいな言葉を使う」という規範的な対人行動と「家族とよく話し合う」「問題解決に家族が助けになる」「家族は仲がいいと思う」という項目が一つにまとまっている。連帯感と規範的行動の取れる人とのつながりに関わる「連帯感（CL1）」と見なすことができる。CL2 は「自分のことは自分でやる」「自分の考えはきちんと言う」「うまくいかなくても気持ちを切り替えてやり直す」「家や学校でよく手伝う」「自分で起きることができる」「登校は早い」「規則正しい生活をしている」という項目がまとまる「生活習慣・自己統制（CL2）」と見なすことができる。CL3 は「いつも元気いっぱい遊ぶ」「みんなと一緒に遊ぶのが好き」「休み時間は校庭で遊ぶことが多い」「大好きな遊びがある」という項目が集まっていることから、「屋外・集団遊び（CL3）」と見なすことができる。子の 3 つのクラスターが健康な子どもの特徴として浮かび上がっている。それとは反対に、CL4 は「嫌なことがあるとすぐ顔に出る」「ちょっとしたことでやる気をなくす」「悪い方へ考えるくせがある」「眠れなくて困っている」「旨がドキドキして困ることがある」「食事がおいしくない」「からだのいろいろなところが痛む」という項目が集まっている。いわゆるストレスとその身体化を特徴とする心身の不健康のクラスターと見なすことができる。そして、生活習慣・自己統制（CL2）、連帯感（CL1）、屋外・集団遊び（CL3）が相互に関連することから、健康な子どもとは良好な対人関係の中で、規範的な行動が身につく、活動的で、行動の自己統制力の発達した子どもであることがわかる。

それらの結果から、健康な子どもは「感情を自己統制する力をもって生活習慣を確立し、社会や他者（家族や周りの人々）との関わりをつくることができ、集団で屋外遊びをする子ども」という捉えができる。

健康な子どもにとっては、遊びは重要である。遊びについては、中村和彦（1999）が「子どもたち

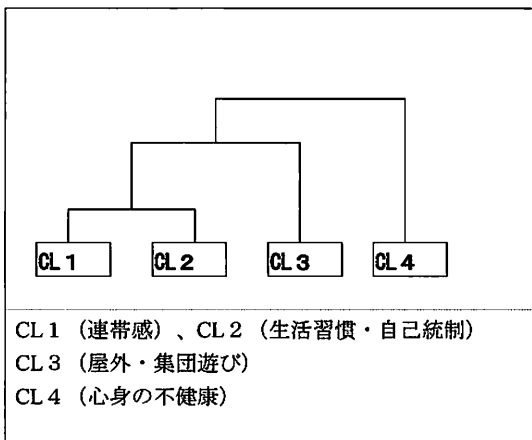


図 1 クラスター分析結果

が楽しく遊ぶためには、遊びの時間、遊びの空間、遊ぶ仲間の3つの条件が重要である。すなわち、遊ぶためにはたっぷり時間がとれること、遊ぶ場所が自由に選べること、その遊びを一緒に楽しめる仲間が存在することである」と述べていることから、群れて遊ぶこと、集団で遊ぶことが重要であることが分かる。

また、池谷裕二(2008)が「意欲・やる気集中力などを発揮するのにプラスとなる刺激を私たちの脳は5感を通じて無意識ながらに取り込んで、それに体も反応している。やる気が起こるのは脳ではなく、体あるいは環境の要因で決まる」と述べていることから、屋外で体全体を使った他者との活動的・動的な遊びは意欲を生じ、学習意欲にも繋がるということが推測できる。

②児童の健康自己概念と学習・遊び・健康関連要因との相関

児童の健康自己概念と学習・遊び・健康関連要因に相関があるかどうかを見た。その結果は、表2表3表4のとおりであった。c1～c6の項目は学習関連要因の項目、c7～c9の項目は遊び関連要因、c10、c11の項目は健康関連要因である。

c1(進学希望水準)	c2(家庭学習時間)	c3(国語の理解)
c4(算数の理解)	c5(親と勉強の会話)	c6(先生と勉強の会話)
c7(体を動かす)	c8(テレビ・ゲーム)	c9(友だちと遊ぶ)
c10(食事に注意)	c11(運動を心がける)	

CL1(連帯感)CL2(生活習慣・自己統制)CL3(屋外集団遊び)の3つの健康自己概念と学習関連要因のc3・c4・c5・c6の項目は高い相関関係を示している。特に、CL2(生活習慣・自己統制)は学習関連要因と高い相関を示す。c7(体を動かす)はCL3(屋外集団遊び)と相関関係を示すが、CL1(連帯感)とCL2(生活習慣・自己統制)とは相関関係を示さない。c9(友だちと遊ぶ)は、CL3(屋外集団遊び)のみ相関関係を示すが、CL1(連帯感)・CL2(生活習慣・自己統制)とは相関関係

表2 全体

	連帯感	生活習慣 自己統制	屋外集団 遊び	心身の 不健康
c1	0.169*	0.216***		
c2	0.167*	0.213***		
c3	0.356***	0.424***		0.241***
c4	0.232***	0.289***		
c5	0.394***	0.368***	0.234***	
c6	0.294***	0.310***	0.266***	
c7			0.446***	
c8				
c9			0.240***	
c10	0.271***	0.314 ***	267***	
c11	0.240***	0.220***	0.407***	

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

を示さない。c10・c11は、cL1(連帯感)・CL2(生活習慣・自己統制)CL3(屋外集団遊び)とともに相関関係を示している。

男子と女子の性差によって、児童の健康自己概念と学習・遊び・健康関連要因の相関関係に違いがあるかどうかを見た。その結果は、表3(男子)表4(女子)のとおりである。

表3と表4を比較すると、男子は健康自己概念の

表3 男子

	連帯感	生活習慣・ 自己統制	屋外集団 遊び	心身の不 健康
c1	0.249*	0.274***	0.236***	
c2	0.160*	0.205***		
c3	0.379***	0.436***	0.284***	
c4	0.302***	0.317***	0.196*	
c5	0.385***	0.430***	0.337***	
c6	0.320***	0.410***	0.324***	
c7			0.300***	
c8				
c9	0.232**		0.352***	-0.202**
c10	0.272***	0.351***	0.322***	-0.233***
c11	0.267***	0.299***	0.332***	-0.228***

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

表4 女子

	連帯感	生活習慣・自己統制	屋外集団遊び	心身の不健康
c1				
c2		0.214***		
c3	0.318***	0.408***		-0.200***
c4	0.172***	0.268***		
c5	0.403***	0.297***		
c6	0.282***	0.196**		
c7			0.403***	
c8				
c9			0.228***	
c10	0.270***	0.272***	0.271***	
c11	0.254***		0.394***	

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

CL1・CL2・CL3 全てが学習関連要因 (C1～C6) と相関を示す。

女子は、健康自己概念のCL2(生活習慣・自己統制)のみが学習関連要因と相関を示し、健康自己概念のCL1とCL3は相関を示さない。この結果から、女子は男子に比べ、自立傾向が強いことが見て取れた。

③ 健康自己概念と CAMI の相関

健康自己概念と CAMI (学習意欲) に相関があるかどうかを見た。その結果は、表5・表6・表7のとおりであった。

CAMIは、Con(達成への統制感:もったいい成績が取れる) AE(努力の保有感:勉強で努力している) AA(能力の保有感:勉強での能力が高い) AL(運の保有感:運良くいい成績が取れる) AT(教師の援助の保有感:勉強で困ったとき先生に教えてもらえる)の項目である。

表5 全体

	連帯感	生活習慣・自己統制	屋外集団遊び	心身の不健康
Con	0.480***	0.617***	0.383***	
AE	0.550***	0.643***	0.292***	-0.271***
AA		0.274***		
AL	0.249***	0.398***	0.230***	
AT	0.473***	0.442***	0.307***	

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

健康自己概念の3つの得点は (CL1・CL2・CL3) は、Con(達成への統制感) AE(努力の保有感) AT(教師の援助の保有感) AL(運の保有感) と正の相関を示す。特に、Con(達成への統制感) AE(努力の保有感) との相関が高い。この結果から、健康自己概念の高い児童は、「勉強」で努力し、「教師の援助」を受けてももっといい成績がとれるという「達成の統制感」が高いことが分かった。特に、健康自己概念のCL2(生活習慣・自己統制)の高い児童にそのような傾向が見られることも分かった。生活習慣の確立の中に、家庭学習習慣の定着が含まれるということ伺わせている。このような結果から、学習意欲の高い子は人との関係が良好で規範意識が発達し、その規範意識のもと生活習慣を形成し、自己の活動・行動をコントロールする力が発達していることが考えられる。学習行動も人(特に教師・親)との関係の中で、学習の価値を認め学習目標に向かって学習行動を自発的にコントロールしていると予測できる。

男子と女子の性差によって、児童の健康自己概念と CAMI (学習意欲) の相関関係に違いがあるかどうかを見た。その結果は、表6(男子)表7(女子)のとおりである。

表6 男子

	連帯感	生活習慣・自己統制	屋外集団遊び	心身の不健康
Con	0.489***	0.629***	0.426***	-0.261***
AE	0.581***	0.680***	0.397***	-0.384***
AA		0.286***		
AL	0.309***	0.458***	0.251***	
AT	0.503***	0.492***	0.332***	

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

表7 女子

	連帯感	生活習慣・自己統制	屋外集団遊び	心身の不健康
Con	0.486***	0.609***	0.365***	
AE	0.506***	0.603***	0.314***	-0.191**
AA		0.274***		
AL	0.213***	0.346***		
AT	0.479***	0.409***	0.243***	

(* P<0.05 ** P<0.01***P<0.001)

表6と表7を比較すると、健康自己概念とCAMIの相関については、男子と女子の性差によって特に大きな違いがないことが分かった。

4 研究の成果と課題

- (1) 沖縄県の4地区(国頭・中頭・那覇・島尻)の児童を対象に、健康のイメージに関する45項目の質問紙で調査し、クラスター分析を行った。その結果、児童の健康イメージである健康自己概念がCL1(連帯感)、CL2(生活習慣・自己統制)、CL3(屋外集団遊び)、CL4(心身の不健康)の4つに分類された。
- (2) 4つの健康自己概念(CL1・CL2・CL3・CL4)のうち、CL1・CL2・CL3は、健康な子どもであり、CL4は不健康な子どもと捉えられた。
- (3) CL1(連帯感)CL2(生活習慣・自己統制)CL3(屋外集団遊び)の3つの健康自己概念と学習関連要因のc3(国語の理解)・c4(算数の理解)・c5(先生と勉強の会話)・c6(親と勉強の会話)の項目は相関関係を示している。特に、CL2(生活習慣・自己統制)は学習関連要因と高い相関を示す。
- (4) 男子は健康自己概念のCL1・CL2・CL3全てが学習関連要因(c1～c6)と相関を示す。女子は、健康自己概念のCL2(生活習慣・自己統制)のみが学習関連要因と相関を示し、健康自己概念のCL1とCL3は相関を示さない。この結果から、女子は男子に比べ、自立傾向が強いことが見て取れた。
- (5) 健康自己概念とCAMI(学習意欲)の関連を見ると、健康自己概念の高い児童は、「勉強」で努力し、「教師の援助」を受けてもっといい成績がとれるという「達成の統制感」が高いことが分かった。特に、健康自己概念のCL2(生活習慣・自己統制)の高い児童にそのような傾向が見られることも分かった。
- (6) 健康自己概念とCAMI(学習意欲)の関連において、男子と女子の性差による違いは見られなかった。

3 まとめ(結論)

調査結果を総括すると、「健康な子どもは、屋外で仲間と体全体を使って活動的に遊び、家族・教師・周りの人々との連帯感を保有し、自己統制力を身につけて生活習慣の確立ができている子ども」と言える。意欲をもって学習していくには、自らで感情を統制する力である根気強さや集中力を身につけること、心身の健康の保持増進を図ることが必要である。身体が弱い・歯が痛い・胃腸の調子が悪い、疲れている時は、学習意欲が湧かず学習に集中できない。また、夜更かし、朝寝坊で、朝食を摂らずに登校するというように生活習慣の乱れがあると、学習意欲が湧かない。

生活習慣の確立には、自己統制が大きく関わっている。決められた時刻に起床・就寝するには、自らの欲望・誘惑に打ち勝つ意志、自己統制力が必要である。9時に就寝すると決めたら、9時以降に見たいテレビがあっても我慢する、6時に起床すると決めたら眠くても寒くても我慢して起床するということは自己統制力が大きく影響している。

つまり、生活習慣の確立に向けた日々の努力は、我慢・忍耐の繰り返しであることから、自己統制力が身につくのである。

健康自己概念の特徴である、連帯感、生活習慣・自己統制は、屋外集団遊びが基盤となっている。これは、生きる力の確かな学力・豊かな心の下支えとなっている「健康・体力」と相通じる。屋外集団遊びの重要性について、中野陸夫(2002)は、次のように述べている。

「子どもたちの健康といった面で、外で身体を動かして遊ぶことの大切さが見直されています。外で遊ぶことを大切にしているのは、それが集団づくりの格好の場であるからです。夢中で身体と身体でぶつかり合う中で、身近になり親しくなってきました。そして、様々なかけ引きや、自分を律すること、ルールを守ること等、人間関係づくりの基礎となることを学んでいくのです。子どもたちの生の人間関係は遊びの中で培われることが多いからです。」

このように屋外で、集団で遊ぶことは、健康自己概念の「連帯感」を高め、自己統制力を培い、

生活習慣の確立にプラスの影響を及ぼすと言える。そして、生活習慣の確立は、心身の健康に影響し、意欲やる気を喚起し、学習面の意欲に繋がっていくと考える。

学習意欲を高めるために、次の点から提起したい。

① 心身の健康は、意欲・やる気と関連が深いことから、健康の保持増進を図る。そのためには、子どもたちに、日々の生活の中で常に健康に対する正しい考え方（健康観）を健康教育を通じて培うことが大切である。そして、健康教育を行うに際しては、まず教師自身の健康観を確立し、教師自身が健康づくりに向けて実践力を身につけることである。

② 屋外集団遊びは、屋外で体全体を使って活動的な遊びをすることで、やり遂げる心地よさを体感し物事に意欲的に取り組むようになる。また、集団で遊ぶことで社会性が身につく。そこで、日課に遊びの時間を設け、遊びの種類・遊び方やコツを指導し、子どもたちが遊びを楽しんでいる場面を多く作る必要がある。そして、遊びの中で起こってくる様々な事柄にどう対処するのかということでは、教師は子どもたちの手本となるので、出来るだけ教師も一緒に遊ぶことが効果を高める。また、下の学年の子どもたちは、上の学年の子どもたちに一緒に遊びに入れてもらい、遊びの種類を教えてもらい、様々な工夫の中で、自分たちで遊びを作り出し、遊びの中でリーダーシップを発揮するようになっていくので、異学年・異年齢で共に遊ぶことも大切である。

日々の生活で遊びは必要であるが、現実には子どもたちには3つの間（仲間・時間・空間）がない状況にあることから、教育課程に「屋外集団遊び」を設ける必要がある。

体全体を使った動的な遊びは、体に反応し脳に刺激を与え、意欲・やる気を起こし、物事に対する意欲・やる気は、学習面においても意欲・やる気を生じることになるからである。

学力向上が叫ばれているが、学力向上の前に児童生徒の学習意欲の喚起の方が先決問題である。

学習意欲のあり方に「健康自己概念」が強く関わることを本研究は示唆しており、「健康な体力」が育たなければ結果として学力向上はおぼつかないことになる。児童生徒がその気にならなければ結局学力は定着しないからである。学習意欲を喚起するには、学習意欲を喚起させるような学習指導法、教材開発が必要であり、健康との関連から「屋外集団遊び」「自己統制・生活習慣」「連帯感」が学習意欲に影響を及ぼすことが分かった。

具体的には、遊びの時間を日課に設け、保護者と連携して基本的な生活習慣を身につけさせること、健康教育を充実し個々の児童生徒に健康自己概念を育むことが必要と考える。

引用文献

- 大澤清二 2000, 健康教育の哲学と方法を求めて, 東山書房
- 下山剛 2000, 学習意欲の見方・導き方, 教育出版
- 小島宏 2008, 学ぶ意欲を高める 100 の方法, 教育出版
- 新井立夫 2009 高等学校で健康な心と体を育てる 指導と評価 6月号 29-32.
- 池谷裕二 2008 やる気は脳ではなく体や環境から生まれる
[http://berd.bennese/center/open/berd/backnumber/2008 13/fea ike](http://berd.bennese/center/open/berd/backnumber/2008%2013/fea%20ike).
- 中村和彦 1998 子どもの遊びの変貌 体育の科学 49.25-27.
- 中野陸夫・長尾彰夫・野口克海共著 2002 私たちがめざす集団づくり～子どもが輝く学校に～, 解放出版社
- 島袋恒男ら 1995 沖縄県の児童の進路発達と学習の原因帰属に関する研究 琉球大学教育学部紀要第46集 I. 101-114.
- Skinner, E.A., Chapman, M., & Baltes, P.B. 1988 Control, means-ends, and agency beliefs: a new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*. 54.117-133.